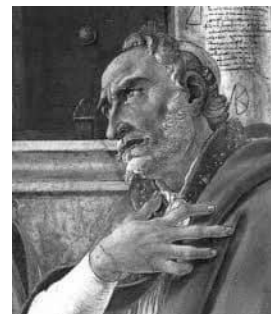


「すでに来られた御子を待望するとは？」(2023.12.10)

酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。

欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。(ローマ 13:13-14)

情欲に流され、なかなか回心できない苦悩のうちでもがいていたアウグスティヌス。ある日、隣の家から、くりかえし歌うような調子で、少年か少女が、「とれ、よめ。とれ、よめ」という声が聞こえ、「これは！」と思い、彼は聖書を開いて、一番最初に目に止まった章を読んだ。するとそこには上掲の御言葉があり、ここで彼は完全に回心したと振り返っている(『告白』)。なんだか物語チックな感じだが、逆にそうした奇跡に近い偶然があったからこそ、アウグスティヌスは力強い信仰者になれたのかもしれない。



今年は12月3日から待降節・アドベントに入りました。私たちは、キリストの降誕を待ち望み、同時にその再臨を待ち望みます。ところで、既に来られたキリストを待ち望む、というのはどういうことでしょうか。タイムスリップして、その当時と同じ体験をする、追体験する、そういう意味があるかと思えます。

もう一つ、12月2日の聖書日課に上掲の御言葉がありました。「主イエス・キリストを身にまといなさい。」しばらく黙想しました。イエス様は衣。その衣をまとえ、という。その衣、あたかもすぐ手の届く所にあるような言い方です。洋服ダンスから衣を出すように、です。あっ、洋服ダンスは私のことか！私は洗礼・聖餐を通してイエス様を宿している。イエス様という衣を持っているのです。

私はその衣をしまいっぱなしにしていないか。持っている事すら忘れていないか。「主イエス・キリストを身にまといなさい。」私の内にキリストが宿っていること、キリストと一つであることを思い起こし、そのことを深く自覚し、キリストの心を心として生きる、それがキリストの降誕を待ち望むということではないだろうか。そういう意味も込めて待降節を過ごしたい。



その具体的展開としてイブ礼拝があります。もっとも伝道に相応しい季節です。12月3日の長老会では細かく奉仕分担(別紙参照)を考え、お一人お一人にお願いすることにしました。

私たちはキリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分です。それぞれ異なった賜物を持っています(ローマ 12:5-6)。それぞれの持ち場・立場で活かされますように。